国家公務員採用総合職試験　教養区分

在学生2人が合格

国家公務員採用総合職試験（大卒程度）教養区分に在学生2人が合格した。12月18日、人事院から発表された。

合格したのは徳竹道大さん（法3）と出宮菜々子さん（文3）。2人は1月23日、馬場杉夫学長に合格を報告。馬場学長は記念品を贈り、激励した。

都合によりお写真は掲載致しません

出宮 菜々子さん
文3　佐藤岳詩ゼミ
神奈川県座間総合高

都合によりお写真は掲載致しません

徳竹 道大さん
法3　森住信人ゼミ
神奈川県桐光学園高

国家公務員採用総合職試験は、春と秋の年2回実施され、本年度の合格者は合計12人となった。教養区分は、専攻分野にとらわれない多様な人材確保を目的にしており、政策の企画立案など実務的な能力を重視した試験区分。本学在学生の合格は3年連続。

公務員試験講座30周年

OBOG会を初開催

1月24日、エクステンションセンターが主催する公務員試験講座のOBOG会が初開催された。生田キャンパスでの講座を受講した卒業生約120人が出席し、旧交を温めた。

公務員試験講座は1996（平8）年度に開講し、30周年を迎えた。生田・神田の両キャンパスでそれぞれ展開されており、試験に精通した専任講師陣が合格に向けて徹底的にサポート。これまでに多くの合格者を輩出してきた。

当日は、全国各地から公務員や一般企業で活躍している元受講生が集結。石川秀樹、中村一樹両講師らには、長年にわたって受講生をサポートしてきた功績をたたえ、花束と記念品が贈られた。

立食で行われた懇親会は終始和やかな雰囲気で、参加者らは思い出話に花を咲かせた。また、同じ講座を受講した仲間という縁もあり、先輩・後輩の垣根を超えて交流し、現在の仕事について語り合った。

金融庁で働く並河夢唆志さん（令6経済）は「先輩や後輩とのつながりもでき、改めて専大の公務員試験講座の出身で良かったと感じた」と話した。

初のOBOG会に約120人が参加した

会計学研究所公開講演会

佐々木名誉教授『スムマ』の意義解説

『スムマ』の会計学的意義を説明する佐々木名誉教授

専修大学会計学研究所（国田清志所長）の公開講演会が12月17日、神田キャンパスで行われた。商学研究所と共催で、佐々木重人名誉教授・前学長による講演「イタリア・ルネサンスの商人に宛てた賜り物―ルカ・パチョーリ著『スムマ』初版：1494年―」を開催した。

『スムマ』（正式名『算術、幾何、比及び比例総覧』）は、15世紀のイタリアで刊行された実用数学書。現代複式簿記の原形であるベネチア式簿記を初めて紹介した活版印刷本として知られ、著者のルカ・パチョーリは「会計の父」とも称されている。

本学図書館は、美術工芸の観点からも貴重な『スムマ』の初版を所蔵。佐々木名誉教授は、購入時のエピソードも織り交ぜながら、この本の歴史的価値や会計学上の意義について語った。

「ルネサンスが生み出した成果の一つ」

刊行当時の時代背景や『スムマ』が出版されるに至った要因を、ルカ・パチョーリが生きた時代、生活した場所、積み重ねたキャリアの観点から丁寧に解説した。複式簿記はその後、ヨーロッパ諸国やアメリカに広がっていく。普及過程を説明するなかで佐々木名誉教授は、「明治期にアメリカから日本にもたらされ、現在は本学の『ラオス複式簿記普及プロジェクト』を通じてラオスに伝えられている」と話した。

レオナルド・ダ・ヴィンチの研究メモには、友人であったルカ・パチョーリの名前が多く書き留められているという逸話も紹介し、「『スムマ』は生み出した成果の一つ」と結んだ。

塚田大誠さん（商3）は「会計学の歴史的書物について知る貴重な機会になった」、今井虹希さん（商3）は「ベネチアというルネサンスという時代が重なって現在の会計の基礎が生まれたことが分かり、感銘を受けた」と感想を述べた。

経済学部「学外特別研修」

インターンの成果報告

経済学部の専門科目「学外特別研修」の発表会が12月6日、生田キャンパスで開かれた。

学外特別研修では、外部講師招へいを含む事前学習の後、夏期休暇中に企業や行政機関、非営利組織で就業体験を行う。「社会人としての実習体験」を通じて、社会を見る目や能動的・積極的に取り組む姿勢などを身につけることを目的にしている。

発表会には2、3年次生7人の受講者が参加し、研修先での経験や成果を報告した。教員や研修先担当者を前に堂々と報告を行い、各受講生の研修の充実ぶりと成長を感じさせるような内容となった。

研修先での経験を報告する学生

最終講義のご案内

■伊藤 博明文学部教授
3月7日（土）14：30～　神田731教室

訃報

石黒吉次郎氏（いしぐろ・きちじろう）名誉教授・元文学部教授
1月6日、79歳で死去。1975年から2017年まで在職。専門は日本文学。

都市と地方の再生の道筋探る

経済学部教授ら出版記念シンポ

経済学部・中村吉明教授編著『都市と地方創生の潮流』の出版を記念したシンポジウムが12月13日、生田キャンパスで開かれた。専修大学出版企画委員会主催。講演とパネルディスカッションを通じて、今後の都市・地方のあり方を探った。

同書は、2022～24年にかけて開催された大学院公開講座のうち、都市・地方に関する講演を編集したもので、25年11月に専修大学出版局から刊行された（下段に紹介記事）。

中村教授のほか、経済学部の長尾謙吉教授、永江雅和教授、塙武郎教授、河藤佳彦教授、NHK報道局経済部『おはよう日本』おはBizキャスターの渡部圭司さんが各章を担当。都市・地方が抱える課題や解決策について論述している。

シンポジウム前半は、中村教授が本の概要を説明した後、各章の執筆者がそれぞれのポイントを解説した。後半は、6人の執筆者によるパネルディスカッションが行われた。

地方が抱える課題について、永江教授が「高度人材の集積や子育て世代の移住を促すためには、教育機関の充実が不可欠」と述べると、地方の取材経験が豊富な渡部さんは成功している自治体の例を挙げながら、「地方にとって課題はチャンスでもある」とコメントした。

書籍の共通テーマである都市・地方の創生について、長尾教授は「今あるものを生かしていくことが大事」、中村教授は「都市と地方を対立する概念として捉えるのではなく、相互につながり、高めあう必要がある」と話した。

パネルディスカッションで意見を交わす執筆者の6人

専修人の新しい本

都市と地方創生の潮流

中村吉明 編著

今後の都市再生、地方創生はどうあるべきか、国内外の過去・現在の事例をもとに、それぞれの執筆者が自身の専門分野の知見を集約して著述した文章を編集した書である。

過去にさかのぼると、日本の地域政策は、東京一極集中是正を基本としていた。しかし今日、都市は老朽化しており、再生しなければならない状況に陥っている。地方も長きにわたって対策を講じてきたにもかかわらず、過疎化が進み、雇用を創出するような産業もなかなか生まれず、生活が成り立たなくなってしまった地域が出てきている。

そのような現状を踏まえ、本書は都市と地方が二項対立ではなく共存して活性化するためのビジョンとアイデアを盛り込んだ書となっている。

（専修大学出版局・税込み2860円）

編著者（なかむら・よしあき）経済学部教授。産業政策論、科学技術政策論。

租税のヨーロッパ統合史

小西杏奈 著

日本では「消費税」として知られる付加価値税は、1950年代にフランスで誕生し、現在では170カ国以上で導入されている。本書は、その世界的普及の初期段階に着目し、フランスで生み出された付加価値税の理念が、ヨーロッパにおける経済統合を通じて共同体加盟国に浸透し、欧州共通付加価値税として確立していく歴史過程を描く。

付加価値税は、その逆進性などを理由に「不公平な税」と批判されることも多い。それにもかかわらず、なぜヨーロッパ諸国では高い税率が適用されているのだろうか。この問いが本書の出発点であった。

ヨーロッパにおける付加価値税の政治的・制度的正当性は、戦後の市場統合の要請とフランスで生み出された理念が結びついたことで確立し、それがヨーロッパ統合進展そのものにも寄与したことを明らかにした。（名古屋大学出版会・税込み6930円）

著者（こにし・あんな）経済学部准教授。財政学、フランス財政史。